

平城宮と松林苑

金子裕之

大和北道路文化財部会 20020510

資料1 平城宮パンフレット

- 2 宮跡内での木簡の出土頻度図
- 3 平城宮の主要井戸とその深さ
- 4 松林苑範囲図
- 5 平城宮跡水位関係資料
- 6 平城遺跡博物館基本構想図

1 平城宮とは

平城京は710年—784年まで74年間の首都である。平城宮はその「都市」平城京の中央北寄りにある宮城のこと。ここには、天皇の住まいと儀式のための宮殿、諸官庁がある。現代風に言うと、皇居に議事堂、霞ヶ関官庁街が一体になった姿となる。

宮城が平城京の北寄りにあるのは、天子南面の原則による。

平城宮の平面形は方形の藤原宮（694-710）や平安宮（794-1185）と異なり、東南の一郭を欠く狭長の長方形である。規模は南北約1km、東西約1.3kmである。これは当時の尺度で、南北二里（1里は約530m）、東西二里半にあたる。

平城宮は平城山丘陵の北端近くに位置し、北形的には南北にのびる三つの丘陵と二つの谷にまたがる。宮城中央部に位置する丘陵上には、大極殿・朝堂院という重要な宮殿区画が東西に並列し、周田の沖積氾には八省と呼ばれた官庁が立ち並んだ。

前者の大極殿・朝堂院は元日朝賀や天皇の即位式、外国使節の迎送など国家的儀式の場所、宮城正面の朱雀門の北にある区画を第一次大極殿・朝堂院地区、東隣の壬生門北にある区画を第二次大極殿・朝堂院地区と呼ぶ。天皇の住まいである内裏は、この第二次地区大極殿の北にある。

宮殿区の左右にある官庁には、太政官、中務省、大蔵省、式部省など八省があり、推計では6,500人余の貴族・官人が勤務した。そこには日常政務を行う建物だけでなく、食堂や宿泊施設、倉庫、井戸やトイレ、基幹排水溝、さらにはゴミ捨て場などがある。大極殿・朝堂院が表座敷とすると、官庁街は裏座敷であり台所、裏口にあたる。

平城宮跡の発掘調査では、当時の政治や宮廷生活を語る大量の木簡など貴重な遺物が見つかり、「地下の正倉院」と言われる。歴史の証人となるこれら遺物群は、特に官庁地区に集中する。そこが貴族・官人の生活の場であるとともに、谷筋で地下水位が高く、木簡など有機質遺物の保存に良好な環境だったことがある。

2 松林苑とは

松林苑は平城宮の後苑である。背後の脅威に対する備えであり、もとは中国に由来する。苑とは一種の庭園施設であるが、現代人の感覚と違って池や橋などの園地関連施設だけではなく宮殿や楼閣、馬場、果樹園、薬草園まで備えた複合施設であり、広大な面積を占めることである。

ここは農園として天皇などの食膳に上る果樹や蔬菜、薬草類などを栽培すると同時に、3月3日や5月5日、7月7日など、今でも馴染み深い年中行事（節日）の場である。年中行事は儀式と馬宴からなるので、一面では主従関係を強化する饗宴の場ともいえる。

当時、四季の規則的な移ろいは天体の運行と密接に関連した。年中行事はこの天体の運行を促す行事であり、年中行事を遂行なく行うことは重要な政治課題であった。

松林苑は奈良時代前半の聖武朝の史料にみえる。その遺跡は平城宮の北にある。四面を平城宮と同規模の築地塀（基底幅3m、推定高5m）で囲ったようで、西面の築地塀は平城宮北面大垣の北240mから京都府との県境である分水嶺付近まで約1.5kmが現存する。

東面大垣の位置は明らかではないが、法蓮・法華寺町の境である国道24号が通る谷の可能性がある。この場合は松林苑の東西幅は約1.8kmとなり、全体の規模は平城宮を凌駕する。いずれにしても、松林苑は平城宮の後苑として、宮と一体であった。

3 平城宮跡での地下水対策

奈良文化財研究所では木簡など有機質遺物の保存に対して、30年余り前から対策を講じてきた。その一は宮跡における地下水の調査であり、いまひとつは地下水位の低下を防ぐために人工の圃池を造成してきたことである。

地下水の調査は1971年以来、宮跡の各所に水位観測用の井戸を整ち観測を継続してきた。ここでは水位だけではなく、水質についても分析し、経年的な変化を調査している。

いまひとつの対策である人工の圃池は、『平城遺跡博物館基本構想』（文化庁1977）に基づき宮跡整備の一環として設けたもので、第一次大極殿地区の西、佐紀池の南方などに複数がある。いまや奈良でも有数の野鳥観察コースとなったこれら圃池を、奈良時代の遺構と誤解される方も少なくない。

平城宮跡の発掘調査は1956年の本格調査の開始から約半世紀。この間に調査を終了したのは、宮城面積131畝の僅か1/3である。宮跡の地下には膨大な遺物が埋もれている。貴重な歴史遺産を末永く後世に伝えるためには、地上地下を含めた良好な環境の保全と充実が必要である。